書き抜き読書ノート 72	2008 年 1 月 8 日

高城剛著「ひきこもり国家日本－なぜ日本はグローバル化の波に乗り遅れたのか」宝島新書(2007年刊)を読む

格差是正の方法を考える

世界がひとつに近づいたことで、企業は労働力を自国だけで賄(まかな)うのではなく、より賃金の安い国にアウトソーシングすることができるようになった。中国が世界の工場になっていることなど、まさにその最たるものだ。ならば、より賃金の安い国、もしくは仕事ができる国など、ランキングの高い国への仕事の依頼は殺到する。単純な労働力だけではない。知識を保有するホワイトカラー層の労働力も、更なる知識を保有する世界の労働者のもとへ移動していく。日本のホワイトカラー層も世界のホワイトカラー層とランキングの高さで争わなければならない時代が到来している。つまり、格差社会の本質とは、日本国内で起きている収入の格差を指すのではなく、全世界からの評価で決まるランキング社会によって起きている必然であると言えるのだ。

P85

世界全体の構造がシフトしているのだから(格差の是正を)日本政府に文句を言っても始まらない。グローバリゼーション時代のルールを知っているかどうか、それが格差社会の上に昇るか、底辺に沈んでしまうかの鍵になる。

P87

自分の身に回ることのすべては、同じ国内の政治家や官僚の所為(せい)と決めつけ、自分は会社と居酒屋を行ったり来たりするだけで済ませている。国が悪いと言っても自分の置かれた立場が変わることはないし、逆に言えば、そこまで国を当てにしている理由は何なのだろうか。

P91

このまま国内市場ばかりを中心に仕事をしている限り、日本の人口は数十人のビリオネアと、1億 2000 万人以上の低所得者層に分かれることだろう。その中間層は、すべて外資と呼ばれている企業や人々に持っていかれる。すでにそうなりつつある。

P98

中途半端で、世界の舞台に立たずに「ひきこもる」日本という国は、詰まるところ世界的な格差社会の「負け国」になるということだ。 P100

これ以上、下層へと落ちていかないためには、格差がはっきりと色濃くなってしまう前に、一念発起するしかない。 P102

這い上がっていくなら今しかない。まだどうにか食えているうちに、変えていかなければならない。 P103